

明治三十六年「台北役者評判記」(二)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2022-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日置, 貴之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22157

資料紹介 明治三十六年「台北役者評判記」(二)

日 置 貴 之

『明治大学教養論集』五五七号に引き続き、明治三十六年（一九〇三）に『台湾日日新報』に連載された「台北役者評判記」の後半を紹介する。本記事の概要および翻刻の方針等については、前号解説を参照していただきたい。なお、『台湾日日新報』明治三十六年二月二十日の紙面では、第二十一回の市川瀧之助評（二月十八日掲載）において、「百文字屋」の評言が欠落しており、後日掲載する旨が断られているが、管見の限り「百文字屋」による瀧之助評がその後同紙に掲載された形跡はない。

なお、前稿および本稿は、JSPS 研究費 18K00234 による成果の一部である。

「本文」

明治三十六年（一九〇三）二月三日

●台北役者評判記（十一）

臺家薔花

台北座の元老嵐薔花の名を知らぬ者は女に非ずとまで謡はれた人気役者イテ御評判な承はらん

〔百文字屋〕 文の評判も去春頃しばくやりました何時見ても石箱で押へ付けた芸風、トント見栄えがない様ですが、

一座では別段邪魔にもならん様子です、此頃は何んだか瀧三郎を真似る様で可笑しく思はれます。

〔笹の家〕 近來めつきり腕を上げられたは、高島屋のおかげと丈の勉強とにあると思ふ、器用な質故此機を失せずどんな端役でも指図次第引受け、大に研究されよ、あまり小手を振り過ぎるは何役でも見ともないく。

〔神州〕 手前味噌の広告を読むが如し、別に意匠あるなく、切りに耳触りある新熟語を用ふ、品物を紹介せんより

広告文を誇らんとす。

〔黙庵〕 未だ大阪を知らないと云ふ役者にしては是で感心でござす、湾的には稍成功して居る、といふのが此人は中々

俐口な人に違ひない、目先も早いそして器用だ、夫れだから本舞台で修業して居らぬと云ふ条役々を器用にこなす、

大向の見物に向く様に演る、是が即此人の人氣のある処だ、併し見る者から見ると口跡と仕科に嫌味がある、芸が

我流で動かぬと云ふ処がない、所謂地廻りの巧者に 固つたといふ方で、奥床しい芸風がないのが惜しうござす、併し

器用で融通の利く調法な役者だ、檜舞台でチト修業したら良くなるでござす。

〔九老人〕 上手でもなく、巧者でもなく、先づ器用とでも云うて置くより外△いません、兎に角四角の角を取るのが

肝腎です、聞けば東京へ修業に出られるとの事ですが、ならば役者の方は止めて法律学校へでも這入り給へ。

(手爾波) 優の白詞は句読をうった様で切り目くがあまり喰切り過ぎるとは久しい一般の評であつたが、近來滅切りに苦心勉強した効でもあらうが、一つは瀧之助や竹三郎のよい型を注入したからであらう、此の調子で行けばまだ上達が出来る事疑ひなしだ。

(梅の家) 此頃は追々僻も直りどうやら見られる様になつたが、まだく、妙変テコな口跡を直し、間違つた台詞を遣はぬ心懸から修業して宜からう大車輪と十字館以来の辛抱とに愛で悪口は預かり置く。

(眼兵衛) 余程見よくなつたとは云ふもの、アノ臭味は到底焼かにはや直るまい、何事でも器用はあるが、其器用に任せて台詞も科も一切出鱈目に遣つて退けるのは恐れ入つた腕前、田舎廻りには必用な役者でせう、近來大分品行が良くなつたとの事、是れ丈けは褒めて置く。

明日は尾上多賀之丞

明治三十六年(一九〇三)二月四日

●台北役者評判記(十二)

尾上多賀之丞

立女形としての大名題恰かも鶏群に天降つた白鶴だとまで来ぬ以前からの大評判者サア願ひます

(笹の家) 優はたしか仙台上に永く居つた人と思ふ、さすが立派な立女形、人が何と言はふとも僕は顔世を見て感心した、顔の批難はあるがこれは是非なし、たしかく。

(九老人) 昔取つた杵柄とは云へませんが、兎に角巧者な女形でゝります、併し眼が始終キヨロくとして居て、一向

に見極りがムいませんから、トント看客へ情がうつりません、白石の信夫なども能く出来ましたが、何となく情に乘が
 来ませんのは気の毒の事でムいます全体がアノ年でもあるしアノ調子でもあるし、アノ面でもある処から、何となく場
 から妙なもので喰はされはせぬかとの気が、見え透いて居る様でムります。

(手爾波) 顔が何だかお化のようであるから、丈に取つては八分の損があるけれど、トコトンも出来るし愁も利くし、
 何か適り役をつけたら屹度見上げるだらうと思つて居た内、果して九段目の戸無瀬と先達つての沢市で、丈の人氣は全然
 昇つた、無論斯くなくてはならぬ筈だ、是でこそ多賀之巫の名を耻かしめぬが、此後とても役によつて馬鹿に旨いの
 と、馬鹿に不味いのとあると云ふ事は、丈の芸振に取つては道がれぬ命数じやテ。

(梅の家) 先代は盛んの頃は名人の秀調さへ頭を上げさせなかつた大名題、斯く申す梅の家などは多見蔵、既雀、九蔵
 など久松座で演つて居た時分から、零落て浅草座へ出た時分まで、先代の芝居は恐らく見なかつた事は無い程の眞負、
 其名を継がれたと言ふ人が来たと聞いたもの、早速見ずんば有るべからずと出掛けたネ、処が百之助が田之助に成つたの
 を見た時よりも、まだ悪い心持がした、世が世ならアノ此処な所不存者奴の是非言はねばならん筈、漸く斯う思ひ直し
 た、菊二郎になる多賀之巫の名ではなく、零落て旅稼ぎを仕て居た多賀之蒸(ママ)の名を継いだものと、成程ソ一思
 ふと此間の果など、何処となく先代が旅で故態と仕過ぎて見せる型として我慢が出来る、雀之丞如きものには逆も企
 て及ばざる処もあるが、何分にも情が移らず、気の毒千萬。

(眼之(ママ)衝) 原の名は多賀次郎、台湾では尾上多賀之丞と名乗る丈けの腕前はたしかにある、一寸見ては判らねど、
 屢々見て居る内に得も言へぬ甘味があるが、何分にも極野卑な芸風、襦袢物は素より世話物の女房でも、何うかすれば
 亭主に掴み蒐りはせぬかと思はる、險呑さ、先づ女形としては湾妻位ゐるが適りであらう、殊に大舞台を踏たと云ふのに
 も拘はらず、アノ小ッばけな台北座でさへ声を通らず、身体の挙動に情と云ふものが皆無、其上アノ面相と来ては

女形としては最も不適当千萬加役ながら眼九郎が好評であつたのは、即ち此人品相応な適り役であつて、ギロくど薄気味の悪い眼までが配合が良かった為であらう、什麼に芸が有ふが腕が達者でも、役々其ものらしからずば上々吉とは申されません、ナンと心を入れ変へて敵役でもなさらんか。

(黙庵) 老功と言は言へ、顔はこけるし、皺はよる、口跡も歯が抜けては聞かれたものじやアがアせん、本当の多賀の丞なら憐れなものでござす、支那料理のこつてり物を喰ふ台北の見物には先づ不向の方だ、処が芸はドーかと云ふに、是は昔取つた杵柄の方で、確かに注意して見る価値が有る、併し是も眼のある人の云ふ事で、一寸見の俗眼には憚りながら判りやすめえ、彼の淋しい陰気な芸に何処に良い所があると尋ねにならうが、丁度油ずくめの支那料理を喰つた揚句に、淡白な日本料理を喰ふように、淡白な中に甘味のある芸の演り口、言ふに言はれぬ甘めえ所もありやすよ、此処らが即ち老功がすよ、賞めてやらねば可愛想でござす。

(百文字屋) 名前丈けを聞いて感寸して居る方が余程結構です、格好にチヨイと氣の利いた処があるが、調子といひ、面と云ひ、全く恐れ入る斗りです、仕草も別段上手な処もなく、第一見えが利かないと云ふのですから、到底幕のしめられる役者では有ませぬ、ア、麒麟も老いぬれば驚馬に均し名代役者も台湾へ渡つて天晴れ耻を晒らして居る先代はサゾ草葉の蔭で喜んでゝらう、など、の述懐は取り措いて、花道などで顔を見せられたら、折角芝居を見に来て胸が悪くなる。

(神州) 焼麩なるべき優は、自ら島田湯皮たらんとす、優は生麩たりし当時の面影も全く亡せたり、然れども優は何処までも輕し、味に邪魔をせず、汁の色を変ぜざるの妙あり、但し料理の台となるべきにあらず、必ずや付け合せるべし。

明日は嵐雀之丞

明治三十六年（一九〇三）二月五日

●台北役者評判記（十三）

嵐雀之丞

今榮座をタンダ一人で背負つて立つてるとまで評判のある立女形極洗い処が伺い度いものです

（神州）舞台向なるべし、年に依つて変化自在なり台辞なるべし、年に依つて変化あることなし、面も白も科も中年増に適す、若きと老いたるとは一種の応用のみ、要するに優は役者らしき役者なり。

（手爾波）トコトンもない、足取りもぶざまであるが、扱丈の顔作りから口跡といひ、舞台こなしの格好といふものは実に無類だ、世話女房でもさせやうものなら、大歌舞伎にパリついて居る俳優でも先づあれまでだ、そこで素人くるとの差別なく、矢鱈に台北の人氣に投合したので、少々は其最負目から不味い処があつても見殺して仕舞ふ、既に評者の僕までがツイ釣り込まれて、雀之丞は好きな役者だといふ事が頭に浸み込んで居るから適當な評が出来ようかと思ふ位だ、とまれ榮座中の否台北中の人氣ものであらう、希願くばお天狗にならぬやうに、一層勉強して貰ひたい。（笹の家）優位の舞台にて情のある人は稀らしい、僕は台北梨園社界の第一のおやまと思ふ、少し役によつてはチヨボに乘過ぎる様に思ひますから、大に注意すべし、優は長唄とやらの名人とき、しが、一度きかせて貰ひたいものです。（百文字屋）立女形拵底の折柄、内地から台湾三界へ斯んな優物が来たのからして、第一の不思議と思はれる位です、世間既に定評がある如く、調子許りでも充分に芝居が出来る、其上格好に願るな処がありますし、チヨイとした思入れや仕草に感心させる処のあるのは、丈と竹三郎の兩人より外には有ません、ホントに高島屋あたりの女房にしたい、台湾で後家を建てさせるのは可愛想な位です、トコトンが無いから如何など、は酷評に過ぎません、強ひて悪口が聞きたければ、先づ手の大きな位でせう。

(黙庵)がたでは台北で先づ此人に止めを刺しやせう、何しろ舞台面の宜いのが大した儲けだ、全体役者は化物と云ふが、此人位も化けるものは先づありやすめエ、素顔を見さつし、子供は泣き出しさうな醜男だ、仕科は何を演つても相応にやつて除ける、先づ無難に稍近いと賞めやせう、此人は明治廿九年まで土方をして居つたといひますが、是は嘘でがせう、口跡は確かりして居る、で役によつては先づ申分がないが、兎もすると腹の中から引きずり出す様な、左様、突飛な口開きをする事がありやす、娘役に婆々役はして欲しくない方だ、遠方から見ると愁ひ顔が笑ひ顔に見ゆるは一つの損、其他は先づよしと申やせう。

(梅の家)今台北での人気役者、若し試みに両座を引くれば、差当り立女形に据えべき人だらうが、赤顔役として梅の家は氣に入らぬ事だらけ、先づ第一に一本調子で更らに変化がない、後室でも姫でも世話女房でも、何時も同じ調子だ、次ぎに舞台が我儘過ぎる、人には構はず自分さへ旨く演れば、他の者には頓着ない様に見える、其次ぎに型が古臭い、彼れ程の役者で鎌腹の弥作の女房など、モツと碎けなければならず、政岡でも齧の生えた田舎流、更らに感服出来なかつた、又其次ぎに女形に最も必要なるトコトンが無さうだ、無暗にチヨボに乗は必竟それ故にコー書き列ぶれば沢山あれど、何れ又の事としましやう。

(九老人)先づ立派な立女形と評を据え置きます、見た中で鳴戸のお弓、伊賀八のお谷などは至極上々吉でふりました、総五郎のお三、弥作の女房などは余り感心しませんでした、勿論拵らへの誤りやら、相手の悪かつた故でもふりませう、先達ての政岡なども丈としては出来の悪い方でしたが例の調子の充分なるため、床の太夫など散つて飛ばされました、振り袖は到底至難しからうと思ふて居りましたが、三代記の時姫を見て吃驚させられました「た」が、併し之れは異例の出来で、矢張立女形が本家でふります、何しろ内地と雖も得易すからざる尤物、評判の後家でお家の礎は貧乏ゆるぎも致しますまい、此上見たいのは重の井、板額、毛谷村のお園と云ふあたりです。

(眼兵衛) 其音調に無量の情があつて、加かも抑揚あり頓挫あり、操縦の自由自在殆ど自然に出で、殊に泣く事の巧みなる、殊に嬉し泣きの様子など決して学んで得らるべきものでは無いです、其上一挙一動徹頭徹尾女性たるの情を失はない処、之れ天稟の正旦、思はず黄絹幼婦と絶叫したい処がある、腕も却々達者です、併し其腕に任かして芝居を仕過ぎるのと、天稟の情愛のある処を濫用し過ぎるので、時々胸の悪くなる事がある、現に今度のお園などが其一例で、余り情を安売するので恰かも色癡狂かと思はれる点があります、苟くも吉岡一味齋が娘の女丈夫、強勇無双の六助が妻とはドーも受け取りがたい、一つは其筋の何たるを咀嚼く文けの学問が無いからであらうが、之れ程の正旦だもの、此辺の注意は最も必用であらう。

明日は実川八百七

明治三十六年（一九〇三）二月六日

●台北役者評判記（十四）

実川八百七

昨年八百三郎等一派と共に乗り込んで来た今台北座での老人株何にでも融通の利く調法者です

(黙庵) 能く沈香も焚かず屁も放らずと云ふが此人でがす、真似目もやる、悪も演る、三枚目も演るが、偕何処にか取止めた藻抜けた処があるかと云ふに無いでがす、三枚目は柄になしサ、所で丸で見られぬかと云ふに左様でない、分相応にやア見られるのが不思議サ、即ち取り止めた処もない代りに、丸ツきり捨てたものでもない、全く良くもないが悪落も余りしない、言はず平凡だ、役者として先づ一人前かぬ。

(笹の家) 芸の善悪は言はぬ方がよろしからむ、イヨー土方屋の親方とほめきましやう。

(百文字屋) 旧臘睦連総見物の時の丈八は、当時の民報でサン、に評致しました通りです、其後二見の仇討で高取八郎と云ふ役、一本調子で、しかも牡丹餅をちぎって投げる様な云ひ廻し振り、顔のきたない処と云ひ、欠伸交りに吹き出した様な三枚目でした、丈の三枚目は臭くて見ては居られぬと同時に、真似目な敵役がスツカリ三枚目に出来上つて居るです、顔から所作から口跡まで、ドー鼻負がツた処でも、門芝居の座頭と云図です。

(神州) 当節の専売特許品なるべし、その考案馬鹿らしき処にあり、使用上調法と云ふにはあらずして、少しく普通の形と異なれりと云ふのみ、而かも専売品丈け融通が利かず。

(梅の家) 三枚目が本業かと思へば、是れはさうでもなく、敵役かと思へばさうでもなく、爺役かと思へば夫れでも無い、誠にエタイの知れない役者だ、何でも出来るか知らんが、何でも能くなし、第一薄キタなくて移らん、是に師直をさせる扱は大きな間違ひ、本人が悪いのでは無い、演せる人が悪いのだ。

(眼兵衛) 第一は其お釜が判然せぬ事、次ぎは何を演してもチ、ム三十三所の観世音に縁のある、毛虱のやうな面つき、夫れに歯抜きの汚穢い口跡、一つもものにならず、強ひてお釜を探ぐれば三枚目であらうが是れも駄目、牡蠣のやうな眼を剥き妙な手附をして、ニヤアと猫の声色を遣ひ出されては逆も堪つたものでなし、ア、助からねえ。

(手爾波) 敵役も利くが老役も利き、社村も利けば囚人も利く、口跡も渋く底があつて、先づ器用な部類、又案外愁ひも利かせる、栄座の五郎ほど活気はないが、小手の利く処は儘かに五郎以上だ、しかし白詞にも仕草にも一種の妙な固定した癖がある、是れは若手のやうに今更取り去る事は出来まい。

(九老人) 何をさせても受取れませんが、三枚目を演せても、敵役をさせても、ウタレを演せましても此等が穴でもあらうか、サツパリうけ取れませんが、今更取り去る事は出来まい、今後とも何を演せやうとの見込は無いままです。

明日は片岡扇平

明治三十六年（一九〇三）二月七日

●台北役者評判記（飛入）

昨日の紙上にお約束せし如く本日は片岡扇平の評判記を掲載する筈であつたが好劇生なる人より嵐雀之丞に就いて評判記の批評とも見るべき一文を寄せられたれば扇平は明日の紙上へ延ばし爰に飛入評を掲載する事としたり

嵐雀之丞

好劇生投

吾輩は頗る付の好劇家である、従つて頗る付の見巧者を以て自ら許して居る、だから今度の八人掛り役者評判記を細読して居るひとりである、毎朝此評判記を読む毎に覺えず奥歯の鳴り片腹の痛む節もあり、心密かに吾輩を其評者の一人に算へられなかつたのを遺憾と思ふて居る、処でシヨコトがないから飛入評を試みた、お係りの人、之に評判記の片隅を貸すの勇氣ありや。

ツラリと並んだ八人様、お気の毒ながら吾輩の眼からは何れを見てもと源藏歎が発せられる、今迄十幾回と続けられた各々方の評判、一々トツチメテグイと押へ付けて遣りたいが、夫れ迄の赤顔でもあるまい、先づ嵐雀之丞といふ人気役者でお合手致さう、神州の台詞は上ツツテ大向へは聞へず、手爾波が足取りに難癖付けたのは心得がたし、吾輩は優がトコトンのないとは一大不思議と思ふて居る位だ、一層の勉強をと勧めたは通れた、そんなよそらの方々が薔花に望んだのと大に見地が違ふ、笹の家の評は毎もと違ひ當場第一等の出来、吾輩甚だ其意を得た、チヨボに乗り過ぎるとは尤もだが、又台北の天地ではトテチンが捨てられぬと云ふ事も承知せねば行かぬ、百文字屋は一体に鳥渡見に惚れたがるキザな処があつて吾輩大に好かぬ、節分の風習を知らずに丸鬚の舞妓を直ぐ奥様だと合点する男だ、夫れはまだしも、処女風に化けた奥様にイヤミをして肘鉄砲を喰されなければ幸ひだ、感心に手の甲の大いなのが惚れた目でヨク見付けた、黙庵が素顔のヒヤカシは少々穏かならぬ、土方だと貶しながら嘘でがせうと遁げた口上が憎い、

梅の家が看板付の赤顔今度初めて現はれた、併し矢張り赤面の価値がない、といふ証拠は赤顔に肝腎な押しが一向に利いて居ない、優の調子を一本で変化がないなど耳が一本木耳かい、黙庵が「兎もすれば腹の中から引づり出す様な」と云はれた、太乙の声などは誰も間違さぬ処だ、ツメの調子は勿論、フリの口跡も充分其上の太乙を聞きされて、一本だ変化がないのといはれた義理かい、其他も之と一般の評で肝腎的が外れて居る、九老人の評は毎度同仁が役者に向つて云ふ如く何んだかクサイく、がヨク見て居られるのには聊か感ずる、扱てドツサリに控へたる眼兵衛、今日吾輩の当の敵だ、「天稟の正旦、這の眼兵衛ヨク吐した、天稟、此天稟の正旦は優を評し尽して余りありだ、元が土方であらうと、飯令トコトンがなからうとチツトも構はぬ、天稟の立女形で沢山だ、斯く吾輩の意を得た眼兵衛が、何故以て優が情を濫用し過ぎると誤認して態々胸を悪くするか、其例として此度のお園を引れたるは益々吾輩の意を失つた、余り情を安売する女狂と見、吉岡が娘、六助の妻と受取られぬとは何たる枇杷の核だ、吾輩茲に於てクドくしけれどお園たるものを説かう、お園を一個の女丈夫と知ると同時に未だ殿御の肌を知らぬ処女たる事を合点せざるべからず、廿歳の上を越したる中どしまたるを思ふと同時に親から許されし其人に逢ひたいくとの恋に焦れ居たるを忘れてはなるまい、女丈夫である事は優が兎を抱へ乍ら懐剣を振り上げたる、一枚画にでもして見たき好格向とトツタをキリリと廻してトンと投げる間に充分なる意気込の格向と思入れとで沢山受取られる、優が現はせし愛情の過ぎたるかの如く誤らるゝのは畢竟、廿才以上の中どしまであるといふ感じであろうが、焦れくた恋人に偶然邂逅した場合だ、歳が三十であろうと五十であろうと、此滴るゝの情があつて少しも差支がない、計りでなく到底なくては適はぬ仕義だ、併し彼お園は未だ処女であると云ふ事を合点して、聊かも男の肌を知つて居る的爱情を見せなかつたのは、尤も褒めてやるべき点だ、それを見誤つた眼兵衛は遂に義眼兵衛たるの誹を免がれまい、型に面白からぬ節もあるチト仕過ぎた仕業もあつたが、他人の真似の出来ぬ処もあつた、頗る善いとは云はぬが可なりなお園だ、八人評をトツチメて遣る

慮見で、ツイく灯燈持をした、雀之丞たるもの須く手爾波が評の末二句を細読すべしだ

明治三十六年（一九〇三）二月八日

●好劇生とやらへ 眼兵衛

ホ、ウ殊勝にも横槍一本とお出だが、雀之丞に初会惚れのシタ、ルキ鋒先き、モ一眼が見えぬと云ふ逆上せ方では、
 迎も敵手の急所を突くなど思ひも奇らず、殊に此眼兵衛を当の敵だてと仰山らしく、切り込んで来るとは慮外千万、
 お手前の台詞じやないが、奥歯が浮き片腹擦ばき事なれど、志の神妙に免じ一手教へて遣はさう、そもお園なるもの
 は一味齋と云ふ英雄の娘で、親の讐を討んとまで思ひ立ちし女丈夫、家庭の教育も思ひ遣られて、殊に六助と云ふ
 大豪傑の妻と自ら許して居る賢女でないか、夫れが何ぞや、廿歳を過ぎて殿御の肌を知らず、内々ウザくして居つた
 にもせよ、其恋男に遭つて淫奔しいとろけん斗りの眼附、薄気味の悪い笑ひ声無遠慮に、女の耻も慎みも打忘れ
 恍惚し、夫れも一利那なら兎も角、永い間のテレく姿、之れが裏店の娘乃至は湾妻、女郎芸者の揚り者ならば兎も
 角、苟くも家庭の嚴重な武家育ちの生娘とある以上は、お園の人格のみか、親の嫉も思ひ遣られて、一味齋の名までも
 下す所業だ、併し大体の筋が斯く出来上つて居るのだからと逃げるかも知らぬが、其処が役者の働きで、生淫奔しい風
 がなく、何処までも武家育ちの生娘の本性失はず、只耻かしいとつ、ましないと云ふ心地でこなすので、筋を演活すと
 云ふのである、お手前はお園が懐剣をり上げたり、トツタを投ぐる意気込杯を反証に挙げられたが、夫れは普通の出来
 で、若し之れが悪かつたならば、雀之丞は箸にも棒にも懸らぬ棒鱈と云はなければならぬのだ、さあグツとでも云へる
 か、併しお手前自らも型に面白からぬ節もあり、チト仕過ぎた処もあつたと逃げて居るから、長追ひは致すまい出直
 してお出で、

●台北役者評判記(十五)

片岡扇平

九州一の三枚目と云ふ振れ込み丈けに今榮座の福の神笑ふ門には屹度来る人氣の御評判願ひ舛

(梅の家) 能い三枚目だと言ふ人も有るだらうが、梅の家には芝居の三枚目とは受け取れない、俄か小屋か寄席の高座なら通用するが、劇場の舞台ではモツと大きく無くてはいけない、此人は噺家になられた方が柄に有りそう。

(笹の家) 三枚目として優はたしかなもの、余り腕に任せ役そのもの、精神を失はぬよう、心がけかんじんく。

(眼兵衛) 色立役や女形に面の註文があると共に、三枚目も余り真似目な面では配合が悪い、丈は先づ其資格を供へて居る、殊に手もあり腕もあつて先づ能い三枚目でせうかな、併し三枚目には軽妙と云ふ二字が必要だ、恰ど能樂の間狂言の如きもので、夫れが重々しくて余り芸を演り過ぎると、シテやワキの演場が無くなる、丈は此心掛に乏しいやうに見える、兎に角円転滑脱と云ふのが三枚目の本色であるとすれば、丈は及ばぬ事遠し矣である、加役に就ては評する程の事はない、唯神妙に勤める処を感じるの外なし。

(九老人) 三枚目としては充分の価値が有ります、昔の文五郎や友三の質ではありませんが、明治の三枚目たるの心得が結構です、尤も丈の面其の物にも既に得が有りますが、腕も確かなもの、常に三枚目として落ち易い弊に落さないで、真面目な処に可笑味を弄するあたり、感心な事で有ります、大前で余り受け取らぬ様子ですが、決して心を痛むるに及びますまいと思はれます、丈の有原屋成平、肉や源右衛門などは老人の待つて居る処で有ります。

(神州) 要の取れた扇なり、骨ばら〜となりて締りと云ふものなし、然れども地紙を取つて破襖を補ふを得べし。
(百文字屋) 面は既に三枚目を動かぬ鏡型だ、百文字屋はまだ丈の本釜ものを見ないから、評者たるの資格に欠けて居るが、先づ今まで見た処では余り揶ぐり過ぎぬ様で結構ですが、又余りに腹が無過ぎはせぬかと思はれる、総じて三

枚目役なるものは、可笑味の動作に過ぎると、逆も見られるもので無いと同時に、可笑味の思入れに乏しかつたら美味が薄い、大向ふをワツワツと騒がすのは能ではなく思はずクス／＼と吹き出させるのが上乘である、扇平が演平なれば結構、煎餅の薄ペラでは面白くない。

(黙庵) 九州切つての三枚目といひやすが、いくら九州でもまさか、併し兎に角滑稽極まる役者でござす顔見た斗りで早吹き出しやすが、あんな顔で役者を志願した所は実にエライ、三枚目なるものは滑稽の顔、滑稽の口跡、滑稽の身振をして見物を笑はせるものであるとすれば、此人などは先天的の三枚目と申やせう、あんな顔付は一寸絵にも書けやせん、併しあの顔は性来でなく、役者になつてから熊本で馬に蹴られたのだともいひやす、芸は取立て、いふ程の事は無い、ザラ一遍の芸だが舞台を熱心に勤る事丈けは、感心だと賞めて置やせう。

(手爾波) 顔の構造から云へば、明壘買々に踏倒さしても三枚目の骨頂なれば、此奴饒舌らせたら屹度面白いに違いないと、頭から買つてかゝつた割合には骨脱して居らぬ、酒嫌ひな間人がお客の望みで、仕方なしに芸をするといふやう方、何処となく厭味がさす、汗うして時々真面目になるなどまだ／＼角の取れやうが足らぬ、概していへば丈は芸よりは顔だ、あの役であの芸は釣り合はぬ、寧ろ役者を廃して、顔で見せる俄師をなさらぬか

明後日は山下三勝

明治三十六年(一九〇三)二月十日

●台北役者評判記(十六)

山下三勝

台北座では随分久しい以前からのお馴染立女形としては随分持て囃された方御評判を願ひます

(笹の家) どうもこなしが不味い、兎角ちよほにのりたがるのは無理はないが、折角の大芝居をうち壊さぬやう、今後共注意かんじんぐ。

(神州) 流行遅れの半襟なるべし、但し掛け人の年配、纏致、着物の取り合せに依つては存外見らるることあり、但し襟善好みにはあらず。

(手爾波) 多年の女形、平日の行ひまでが女形になつて居るが、哭しい事に角がある、大阪癖せの言葉、是れはあながち悪いとは申さぬが、何だか苦になる処がある、自分にはよく利かさうと研究する節もよく目立つが、其処が矢ッ張り角になる、又丈は着物を余りキツチリ着過ぎて、帯を太鼓に結ぶ癖と間さへあれば両方の袖口を引つ張る癖がある、併し芸に熱心な丈はほめて置く。

(九老人) 何とも評の致しやうも無いません、先づ奥方ものでお茶でも濁して置く方です。

(梅の家) 元来僻(ママ) 沢山の女形、是れでも多賀之巫や雀之巫の来ない間は致方なく我慢して見て居たが今となつては鼻液をヒツかける人もなしとかや、思へば果敢ない浮世じやなあと、今日此頃の述懐なるべし、誠に気の毒千万。

(眼兵衛) 余り蔑視して遣るは可愛想だ、しかし一體が極めいつた芸風で、花と云もの薬にたくてもなく、一挙一動ギク／＼とだめを押して行くと云ふ厭な角があつて、見物に飽き／＼させる風があるは、丈の大欠点であらう。

(黙庵) 此人はツンと澄して、誠にすぎないもの、言ひ方をする人だ、従つて情が甚だ薄い、首を余り長くするの澄す様に見える、立たない声を無理に出すので、首筋に大きな筋を出し、突ッ掛かる様な口跡ですげなく聞える、愁ひも充分に利かず、是れ丈けが惜い所だ、其代り顔も先づ可なりで品も相当にあり、又すげなく見ゆる丈けに、喧嘩応対詰め台詞など、来た日にやア、誠によく適つて気味のよい様だ、夫れに感心なのは舞台を割合に神妙に勤めて、

絶句しないのが妙でござす、娘役は止しにさつせエー。

(百文字屋) これまで度々悪口を叩きましたが、万更捨てた女形ではありません、前帯物などを扮せて置けば出来て居ます、兎に角小姑の多い中で、殊に今度は七十幾歳とかいふ舅殿も来られた中で、御辛抱なさる丈けでも感心な事と申置きます。

明日は阪東五郎

明治三十六年(一九〇三)二月十一日

●台北役者評判記(十七)

阪東五郎

栄座では老人株の一人敵役が本業ださうに△いますが何にでも融通の利く都合の宜い役者です

(黙庵) 片眼が義眼だそうなが気の毒なものでござす眼が利かぬのは尤も、是で眼が利いたらウント引立つでがしやう、口跡もチオイと妙な癖はあるが、確つかりとした口調でサラ／＼と気味の良い口跡じや、芸を熱心に演るので中々見よいじやて、素より飛抜けては居ないが、年齢が年齢だけに貫目も稍あつて、かれて居るじや、夫れで余り僻のないのが嬉しうござす、併し此人は際立つて堪らぬといふ程良い処は実無いじや、腹芸も無論ない、詰り年功だけに芸がかれて厭味のないところが此人の身上でござす、注意して置くが、大向ふ受の芸頭は止めさつしやれ。

(眼兵衛) 眼の故でもあらうが、両の肩に四十度と云ふ角度を取り、双手をグツト無器用に突ツ張り一寸した足踏にも地響を打たさねば気が済まぬといふ質、倅堅いはく、歯も牙も立つものでない又噛み締めた処で何の旨味も△らぬ、マア敵役としても下品なりヤンコ杯が適りで、長ドスなどはチト堅過ぎてうづるまい。

(百文字屋) 舞台が車輪で、夫れに臭くないのが結構、鬼瓦の胴八といふ様な強い三枚目敵がソツクリだらうと思はれる、台詞が重くるしい様ですが別段夫れが恐れ入る程でもない、但し鷲が鱒を踏む的の足元は危険い。

(神州) 米は上白なりしならんも然れどもお三山出しにして炊き切れず、焦げ附かせ、煤らせて喰ふに堪へず、全く廃物となりぬ。

(九老人) 敵役はよろし、併しお家敵よりも世話敵の方宜しい様でゐます、老人は優を中年の役者と見ました、第一腰から下が出来て居りません、調子も一本で誉めたものではゐませんが、台詞の云ひ廻しが中々修業の足つた処がゐます、蝙蝠安や元右衛門を演せば間違ひはありますまい、第一舞台に熱心なるは誉むべき事でゐませう。

(笹の家) 優は古い頃中島座に見た事がありました、其後は旅廻りのみして居つたものならん、芝居道には中々詳しくき人にて、世話もの、悪などは達者な腕があります。

(梅の家) 講釈師かテロレン左衛門に成られた方が良かったらうと思ふ、どうしても台詞廻しは釈師だ、此間の九太夫の引込みの喋舌などは手に入つたもの、思ひ入りとか仕草とかいふ事になるとテンで話にならず、敵役が本業だそうだが、何回となく見た中で悪々しい仕打などは御目に懸つた事なく、左ればとて加役でも是れといふ感ずつたものを残念ながら見せられ申さず「唯々抜けた調子放れのダミ声を聞かされると、厭な僻を見せられる丈けの事。

(手爾波) 口跡はどうしても浮かれぶしか軍談読みのやうに出来て居るが、兎まれ舞台は大きい魚の鱗を嵌めたやうな眼も、或る場合には毒気があつて邪魔にならぬが、見栄する時に必一度づ、顔を妙に振る、之れは余り目に立ちてほめられぬ否寧ろ厭味である、けれど喰ひ切りのよい白詞廻しは丈の一番長所であらうか。

明後日は尾上卯多三郎

明治三十六年（一九〇三）二月十四日

●台北役者評判記（十八）

尾上卯多三郎

今春初めて台湾下りの新顔今では台北座の人氣役者確かに一方の旗頭でいますサテ御評判は

（笹之家） 丈はお大阪角の芝居辺にて生れた人だそうだが、優の芸風甚だ氣に入りました、所謂門前の小僧習はぬ経読むの類ひ、まことに氣用な質のようです、高島屋の中軸としては、充分立派く。

（百文字屋） 十段目の重次郎を見た斗りで、此役者がドウだとかカウだとか言はれた筋合でも無いのだが、折角揃つた評判記に一人丈け抜けるのは、何だか調子が洩れる様の氣持がするので、重次郎も手負の出からはモ一つ感心しませんでしたが、初めの処は中く心得たもので、慥かに利口な役者と受取りました、調子も面もよく仕草も出来る様です、先づ当分色立役は此仁でしよう、位ゐのセメント義齒で御免を蒙る。

（九老人） お目見えダンマリの幕外で六法を見た時には、蕾二郎のウワマへを跳ねる男と厭氣に取りましたが、其後見直して別段臭い事もなく、当地では先づ上手な方でムりませう、がまだ之といふ仕手を見ません、八百三郎の代りとして上々の代呂物でムいます。

（神州） 鮪なるべし、刺身ともなすべし難波煮ともすべし、刺身たるに於て比較的淡白なり、難波煮たるに於て甚だひつこし、去れど何れにしても脂切つたる役者に相違なし。

（眼兵衛） まだ充分に見ません、所謂一班を見て全豹を評するのであるが先づ立派な立役です、先日の天一坊の池田大助などはズンと氣に入りました又重次郎は去る見巧者が非常に褒めて居られたが私はテンデ氣に入りませなんだ、舞の手が有ると云ふので直ぐに踊りたがる癖がある、其上チヨボに乗り過ぎるものだから、宛然操り人形と云ふ見え

であつた、総じて大時代よりは世話の方がよい様である、併しポケヤは何處であらうか一寸疑問で、兎に角豪い人気者だが、腕は竹三郎より下でせう。

(黙庵) 此人も台北では先づ指折の中でがしよ、全体誰に就いて修業したか知りやせぬが、芸風が誠に気に入つた、余り派手でもなく演り過ぎもなく奥床しい、温順しい芸だ、併し小言を言へば少々貫目だに乏しく、役に依つては喰ひ足らず、今一息といふ所のあるは、所謂未だ老熟の域に達せないもので、年が若いから仕方がありません、年を経るに従つては良い役者になるでがしよ、口跡も余り厭味もなし、其上顔が第一良い、要するに余り癖のない稍満足に近い役者で、此上一勉強したら役者として成功すべしだ。イヨー色男。

(梅の家) 台湾で役者らしい役者と謂ふのは先づ此人だらう、何を演せても達者く、未だ能く見て居らんが将来一番の人氣役者になるであらうと思ふ聞けば金城の未広座とやらで好ひ顔で有つたさうな、オツと梅の家赤顔役で有つた、モウ余程お白粉を附けて仕舞つたが、丈には一本参らずばなるまい、余り腕に任せて演り過し場当りをするのが気に入らない、過日丈の平右衛門を調子が悪いと評し、十把一束で誰かの攻撃を受けた事が有つたが、ドウも此人の口跡にオモツ苦しいところが聞えて成らん、此間の清水一学など仕事には難は無いが、台詞廻しの悪ひ為に勇氣凜然たるところが乏しくなる様に思ふが如何に、此次は碎けたポケを見せてもらいたし、出直して又評して見ましやう。

(手爾波) 阪東箕助座頭で書出しを永らく演て居た丈け、落付いて小まかい手がある口跡もなか／＼場をせる、トコトンは瀧之助よりある、愁も相應に利くが、役によつては垂れさせる事がある、之れも台北での書出し役者としては不足は言はれぬ方だ。

明日は片岡我久蔵

明治三十六年（一九〇三）二月十五日

●台北役者評判記（十九）

片岡我久蔵

大松島屋の高弟と云ふことで栄座開業の際座頭となつて乗込んで来た大立者確かり頼みますよ

（手爾波）遊女から呉れた艶簡の如く、初めて見た時は一向読み下にくかつたが、度重ねて見るうちに段々見よくなつて来る、又鯛の如く最初口へ入れた時は一向、味が無かつたが、段々噛みしめて見るほど旨味が出る、殊に口跡が明白で、キツカケがよくて渋味がある、十役附けて十役ながら見劣りがせぬ点に於ては、瀧三郎を凌駕するかも知れぬ。（黙庵）芸風が淋しいから逆此人を貶すべからず、活気が無いから逆まづいとは言はれぬものサ、此人は松島屋の弟子といふからには、淋しい俗受けのせないのは尤も千万、中によあ屈つた糞の様に言ふものもありやすが、そう捨てたものじゃござせん、淋しい中に又好い処もありやす、役々を沢山長く見て居ないと此人の味が判りやせん、と言ふと余程甘味がある様に聞えやすが、此人には疵が大分ある、何を演せてもといふ訳にやあいかぬ、惜い事だが役不向がある、乃ち融通が利きやせん、口跡の一本調子と足元の不格好なのが是又欠点、淋しいのは合点でも腹芸の無いのは不得心だ、是文けが重なる疵だ、此他は眼玉もよし芸に一風変つた妙味がある、兎も角役受のしない損な役者でござ、本人も俗受のしないは（台北の見物に）損と思つたか、ポツ／＼芸風を改めると言つてる相な、此中の若狭之助から早少し違つて来た是は併し悪い量見だ、我久さん止めさつし〜。

（神州）貫目あり、貫目なし、上手なるが如くして上手ならず、実情は籠れり、去りとして意は足らず悪なるべくして悪ならず、善にもあらで善なり、優は可憐想な役者なり、優は偽筆書なり。

（百文字屋）香具屋の弥平はどこまでも弥平に出来て居まするし、対面の工藤は落附もあり、貫目もありました、評者

は此二た役より外は見ませんが是まで耳にした評判と評者の見た目とは、大分違て居る様に思ひます。

(梅の家) 最初は不評だつたが段々味が出て来た、此間の忠臣蔵などは此人だけが見られた、然し座頭といふ代物ではない、別に確かりした役者が座つて、此人をワキに遣はなければ此人も損、是れは悪口では無い真実の話、彦三郎や瀧三郎の様な木偶坊の對手でなければ、屹度見られるに相違なし、惜しいものさ。

(九老人) お目見えに十段目の光秀を見ました時には、何たる化物の役者かと思ひました、陸連物見物の時の石屋の弥陀六を見まして、当時入院中の百文字屋へ、今度の我久蔵と云ふ役者は飛んだ喰はせもので、成つては居らぬ、光秀も出来ねば弥陀六も出来ない、是ではトント持つて行き処があるまいと、話した事がりました、併し其後何となく見直して、週日先代萩の外記などは當場第一の出来で、確かに栄座一方の旗頭として充分でります、丈の見処は敢へて舞台を捨てるに非らず、まだ演て出来る処を演ぬあたりの甘味にあるかと思はれます、名のあるウタレカドントしたる敵役を演せて措けば、大した間違ひはあるまい。

(笹の家) 優の芸風は大に気に入りました、又確かに達者なものです、口跡の一本が兎角損だが、芸を売らぬ処、我等江戸ツ子には嬉しい。

(眼兵衛) 之れ程の役者に惜いかな二個の大難がある、一は口跡で、随分幅もあり通る声であるが、語尾が悉くパツと散り、時には消えて了つて誠に締りと云ふものが着かない、生世話物など、来ると弥々甚しく、何だかブツと小言を云つて居る如くで少しも引立ず、一は足元でトボくと浮て居る様で、物によつては見よい処もあるが夫れが又故態とらしく、自然でない、何かなしに爺さんの足元である、摺足などはカラ駄目、踵に斗り力を入れるので、他から見て居ると後へ倒れそうに浮雲い心地がする、併し芸風は極洗い方で、厭味場当りなど微塵気もなく、立役として耻かしからぬ腕前がある、併し洗いのを通り過ぎると得て無味乾燥に陥り易いものだ、此辺の注意肝要。

明後日は市川瀧三郎

明治三十六年（一九〇三）二月十七日

●台北役者評判記（二十）

市川瀧三郎

生粹まきつゝの上方役者かみかたやくしや今榮座いまえいざの座頭ざとうとして足元差出あしもとさしだしまで許ゆるされて居ると云ふ大立者おほなたちもの御評判ごひやうばんを願ねがひ升ま

（九老人）初めての高田善蔵たかだぜんざうは兎とに角かくでムリしましたが、曾我そがの五郎ごろうと云ひ、扇屋あふぎやの熊谷くまがやといひ、鎌腹かまばらの弥作やまくといひ、堀坊ほりばかの与次郎よじらうと言ひ、由良ゆら之助のすけと云ひ、何れも甚はなはだ不出来ふできで、到底たうてい同座どうざの座頭ざとうたる貫目くわんめはムいませぬ、此上このへは伊賀いが八はちの政右衛門まさゑもんか躰たいの筆助ひつすけか、彦山ひこやまの六助むすけか、此三このつを見みせて貰もらひたい、是れで見直みなほしが出来ぬ様ようなれば、早はやくお払はらひ箱ばこにして貰もらひたいと思おもふて居ゐた処ところ、其後そのご六助むすけが出でたので早速見まに行ゆきましたが、是も大これの不出来ふできでムりました、イヤハヤ。（手爾波）最初さいしゆ由良ゆら之助のすけで味噌みそをつけたから、氣早きまやな見連けんれんは大ミクビリにミクビツたが、段々だんく後の芸げいを見れば満更まんぜうでもない、矢ッ張やっば榮座えいざの牛耳うしじを執とるに足たるものありだ、相馬さうま大作だいさくもなか／＼見みられた仁木につき彈正だんじやうは団蔵だんざうのが僕ぼくの頭あたまに沁しみ込んで居ゐる為ためか目に喰くがあつて頬骨ほほほねから下のコケて居ゐる役者やくしやでなくば、彈正だんじやうらしくないと思おもふから、下彫しもぼくらの瀧三郎たきざらうでは何なにとなく氣きが乗のらななだが、安立あだち元右衛門げんゑもんと来ては実じつに旨じつかつた、彼あアいふ役やくを演えんせるなら台湾たいわん無類むるいだ、併しかし丈ぢやうは凡ぼんて顔かほに力ちからを入れる割合わりあひに手に力ちからを入れぬ、否いな寧なろ手てが遊あそんで居ゐる、又また口跡くちせきとしても優いうに両座りやうざに冠くわんたるものであらう、兎とに角一得かくしとく一失いちしつはあれども、台湾たいわんでは余あまりケナス事ことの出来ぬ役者やくしやでがなあらう。

（梅の家）まだ来こない前まへには由良ゆら之助のすけの出来できる役者やくしやだなど、ドエライ前触まへふれだつたが、何なにだペラボーな、其由良そのゆら之助のすけなどは雷次郎らいじらうと余あまり違ちがはない位くらいるだ、ソソンならクダケた物ものはと言いふと鎌腹かまばらを見みたがイヤもう飛とんだお茶番ちやばん、御当人ごたうじんが苦心くしん

して居る程見物が受けず、クダラ無き加減が分らぬ、厭気に取つて面火などを遣つて居る程、実にチャンチャラ可笑しい、外に出し物があるかは知らず、今の方では遠慮なくカマセ物を素ッ齒抜けて置いて差支へない、榮座の爲めには橋五郎を置く方が遙か増したつたに、何と役者を止めさせて太夫元にしてやらツしやれぬか、其方が徳用だぜ。

(笹の家) 優も座頭として中々貫目もあり、何んでも間に合ふ風に見受けますが、少し腹芸に乏しきだけ残念におもひます、其方が人気受けよきなど、あまりにらまぬやうたのみまつせ。

(百文字屋) 杜村弘底の同座で、梅鉢の安房守に初見参、之れなれば先づくと思ふて居つた処、蝶千鳥の我會(ママ)の五郎に四面から攻撃の箭先へ、例の眼兵衛九老人の徒が近江八幡の見えで評者の棧敷へ詰め寄せ、將に以て赤沢山の毒箭を放たんとす勢に、マアく待つた、切りの熊谷こそ当の敵ぢや屹度見て貰ひましよう、鼻屑つた自分の顔が見られさうなで、早々逃げて戻つた、其夜の夢に此芝居には由縁もない座頭のお化が猿に喰れた。

(眼兵衛) 一番グツと睡みを極め込む考へであつたが、聞けば二三日前から病気で台北医院へ入院せられたとやら、余り極め込んで若しも病気の障りにでもなると気の毒だから、何事も申すまい、唯病気が全快したら一日も早く内地へ帰り玉へ、台湾は氣候が悪いから迂路くする処ではありません、氣候の良い九州廻りの方が良いでしょう、吾妻から送つた引幕の肩に贈と云ふ印が書いてあるが、其贈と云ふ字が扁とつくりが上下になつて居るので、一寸見には見曾と書いてあるやうにみえます、台湾あたりへ来て見曾を附けられて堪るものか、早く帰りなさい、悪い事は申さぬ、併し菱に邪推を廻しては厭だよ、眼兵衛は大の播磨屋鼻屑だ、訝しく取りなさんなや。

(神州) 上白なる役者と申すべし、花やかなる役者と申すべし、円形なる芸風なり、終に悽愴たる能はず、終に葉桜の趣致あるなく、竟に角度ある事なし、已むを得ずんば鈍角なるべし。

(黙庵) 先づ台北では上々の部に這入りやせう、が併し大きいとは言はれません、チーと足りやせん、背丈けの事じや

あがあせん芸がサ、背の低いのも一割損でござ、全体此人の芸はセ、コマしくてソワ／＼して居りやす、といふと成つて居ない様に聞えやすが、イーエサその足許差出し蒲団の許りて居る人にしては其割合にといふのでゐるて夫れで腹芸といふのがチツともらぬ、台詞の遣ひ方からして落附がない、惜しいもんでげさあ、大舞台を背負つて立たうと言ふのはモ少つと大きなところが、ソレ目玉一つで二千の見物に息もさせないと言ふ奴サ、併し西京に居つた丈に愛嬌のある役者だ、確かに或一派にやあ持てますなあ、で先づ今日の人氣があるといふ訳でがしよう、顔口跡は申分なし、モツト洗ひ大きい処を見たいものだが、是は望蜀の嘆かね、茲でチヨイと御見物に申上やす、夢にも吾妻に於て此人の悪口を叩くべからず、ウンと賞めたら口ハで飲ませるトサ。

明日は市川瀧之助。

明治三十六年（一九〇三）二月十八日

●台北役者評判記（廿一）

市川瀧之助

階下後に控えしは台北座の真打名も高島屋の高弟元の名は市川左升よしなに御評判を願ひ申す

（神州）落付はあり、但し思慮に乏し、此落付は黒人好きのする処、この思慮に乏しき処は大向に受ける処なるべし、落付は自己の芸風を示すにあり思慮に乏しきは一座に芝居をさせん為めなり、彼は人氣役者なり、人氣の為めには或は芝居を壊すことをも辞せざるべし。

（眼兵衛）何が何でも此人が台北一であらう、で今更仰々しくお提灯を奉納する事は止めにして、一番梅の家のお株へ切込み、憎まれ口を淡泊囁すつて見よう、第一台詞廻しが旨くていかにも軽々と出るので、或ものに於ては氣味のよい

江戸兎らしい処が嬉しいが、夫れがホンの咽喉から先きで出る声で、根強い腹の底から自然に出る調子が無い為め、上三りがして実情に乏しい、熱誠を籠めねばならぬ台詞などでも、何となく軽薄に聞える、先づ白悪といふ処が適りであらう、又仕草の点に於ても総て模倣的で、唯瀧之助が或るものに扮して居る斗り、瀧之助其者が直ちに或る者に成り切る事が出来ない、早く謂はゞ何処までも芝居をして居る心持であるから、矢張熱情に乏しい、例の高島屋一流の劇しいタテでも、勿論对手が相手だからでもあらふが、ホンの手先き斗りてつまり真似方であるのだ、で我々は何処が真実の瀧之助の腕前であるかと云ふ事を見るに苦むのだ、古人や師匠の真似をして、立派な一人前の人間が幻燈器となり蓄音器となつて、夫れを得意がつて居る役者は東京でも少くないが、頗る無見識の極ではないか、八釜敷い親爺の膝元を離れて、折角台湾の自由天地へ来た甲斐には、格も法も何にも要らない、一番自分の見識で思ふ存分に演つて退けて欲しい、併し鍍金物でなければ人氣が取れないと云ふのならば、我輩又何を可言はんやだ。

(九老人) 台湾では決して下手な役者では有りませんが、台詞廻しが何時も一樣のやうです、腹の割合には小手が利かぬ、丁度竹三郎と反対で有りましょう、旧俳優に据るよりも、壮士俳優なれば一廉会長資格が出来るだらうと思はれます、旧芝居では先づ天下茶屋の東馬か、覽の滝口などは箱り役で有りませう。

(黙庵) 何んと言ふても是が先づ台北の親玉でがしやう、左団次の弟子だけに万事が高島屋張り、思ひ入れに口跡など能く似て居る、貫目もあり腹芸もあつて軽うて、先づは老巧と言つて然るべしだ慾を言へば目玉がモ一少つと有つたら尚ほ良うがしやう、穴を拾へば台詞の抑揚に無闇にガル処がある、所謂高島屋がりたい様に気取る様に聞えて惜しうがす、思ふた程悪が利かず、立廻りも存外見られず、無闇論タテの悪いは素より承知、先づ是位のが疵でがしやう、兎まれ流石は高島屋だ舞台が大きい哩、崇拜は致さぬが先づは台北一品でござ、大舞台で見たいが、台湾では台北座よりは師匠から封じられて居るといふ話し、惜しいくイヨー親玉。

(笹の家) 優は僕在京の折、明治二十五年の頃でありしが、芝高砂座にて歌女太郎(今の菊十郎)花昇時若などの一座のとき、玉三の采女の助三千歳の金子市之丞等を見ましたが、其時分はお気の毒ながら大向ふより、大根の声がつた仲間でした、不図も台北座にて見ようとは、実に別人の感あるほど格段の上達、確かに座頭の貫目もあり、歌舞伎の気合、只うれしく思ふのみです。

(梅の家) 梅の家決して器用な役者とは見て居らんが、此間の高田善蔵は訣別の場のクドキなどの不器用さ加減、余りと言へばヒドかつたね、御当人も苦しかつたらうが見物も苦しかつたぜ、一本調子は師匠が師匠だけに致し方無いが、モソツと思入りだけは工風して貰ひたひ、ドーもシンみりと堪能出来ない、成らう事なら此人の上へ行く役者を一枚入れて、此人をワキに遣つて見せて貰ひたし、トハ言ふもの、此人が来てくれたので台北座の舞台が締つて、梅の家等も提燈持の必要が無くなり、是れから思ひ切つて悪口が言へる様になつた次第、如何に赤顔役でも此所チヨつと御礼申さずばなるまいかい。

(手爾波) 素は女形師で左昇となつたも、余り脊が高過ぎて蚤の夫婦見たやうな感があつたから立役になつたので、既に立役になつてから七年目ださうだ、併し丈は立役となつてから芸道が益進んだのは、僕の郷里に永く居たからよく知つて居る、其頃から阪東鶴之助座頭で書出しにはなつて居るもの、矢張り座頭役ををもに取つて居た、兎に角台北へ来ても貫目で押通す、実に此貫目は台北座を天秤にかけても、瀧之助の方がツツと重い、否寧ろ台北座の舞台が軽過ぎて、提灯に釣鐘のやうな感がある、又言葉のまはし工合など、逆も他人で真似が出来ぬよい処がある、コセくした役は出来ぬが、闊格もなかく荒つばい、併し優は役好みがする、だから滅法能いものと滅法悪いものがある、踊りも女形時代に凝つて習つたけれど、今の芸とは釣り合はぬ、又あんな大兵では却つて踊らぬ方がよい、高島屋の弟子中でも口跡と仕草を旨く取つたは丈の外に余りないやうだ、何にせ大阪芝居にかぶれた眼には当嵌まらぬかしらぬ

が、東京眞蹟の目には慥かに小気味よく感ぜられるマア此優が台北では一枚飛放れて居るであらう。(千秋楽)

(ひおき・たかゆき 情報コミュニケーション学部准教授)